

# 子どもたちの自立を育む複式の縦割り活動

—いもパーティー成功に向けて—

秋 山 哲

## 1. 異学年集団のよさを生かす縦割り活動

本校の複式学級は、低学年・中学年・高学年の3学級からなっている。したがって、一つの学級の中に二つの学年があるのである。複式学級では、縦割りのグループを作って複式学級全体の行事等を行っている。一年生を迎える会や、帝釈小学校(数年前から年に一度の直接交流を行ってきた)との交流など高学年の子ども達を中心に会を運営してきている。一年間の複式学級での主な行事の内、いもパーティーに関しては複式中学年の子ども達を中心に運営してきている。中学年で行事の運営を経験することは、次の3点において意義深いと考えている。

- ① 高学年に向けて子どもたち自身の自信となること
- ② 高学年の子ども達の会の運営の仕方に注目できるようになること。
- ③ 会への積極的な参加につながる事

これらに子ども達が気付くためには、もちろん教師の働きかけが重要である。集会そのものを楽しむことに加え、集会を運営している人たちの心配りや準備物、工夫点などについて気付いたことに評価したり、教師の側から紹介したりを積み重ねていくことが必要であろうと思われる。

複式学級の子ども達が、年々高まっていけるよい機会として行事をとらえ、それぞれの年に工夫した点が受け継がれていくことねらいとして取り組んでいる。

## 2. いもパーティーをめざして

複式中学年の計画する行事は次のようなものである。

- ① さつまいもの苗を植える。
- ② さつまいもを掘る。
- ③ パーティーの計画を立てる。
- ④ パーティーをする。

子ども達の記憶の中には、これらの4つの場面はよく残っている。特に4年生は1年前のことをよく覚えている。そこで、計画を立てていくとき4年生に昨年度のことについて話をさせた。3年生には、質問をさせることで1年前の行事の様子を明らかにしていった。学級の中でのこうした取り組みは、上学年として4年生に活躍の場を与えることになり、3年生にとっても来年を見通すよい機会になると考えている。異学年集団のよさを発揮できるよい機会ととらえている。

こうした話し合いの中で、

- ・苗を植える前にも仕事のあること。
- ・いもの世話がたいへんなこと。
- ・低学年や高学年に内容を知らせなくてはならないこと
- ・全員が集まって話し合いができる場が必要なこと

など行事のあらましを全員が共通確認した。

### (1) さつまいもの苗を植える

まず畑に全員で行ってみた。そこは一面の草原でまず草抜きがたいへんなことがわかった。畑を耕すのは子どもの力では難しいので教師が行った。作業を行う中で肥料のことや、畝の大きさについても質問が出た。畝は、縦割班に一つになるようにつくことにした。

さつまいもを植える前に、いもの植え方や育て方について低学年の子どもたちに説明しなければならない。1年生にとっては初めてのことであり、生活科の学習もかねているいも植えになるからだ。

ここでも説明や、会の進行は4年生で行うことにした。3年生には、次の複中のリーダーとしてしっかり会の様子を記憶に留めてほしいと考えた。いも植え会を終えて、子ども達が気付いたことがあった。

- ・会を進行するのは4年生であったが、縦割り班の人を並べたりみんなを静かにさせたりしたのは6年生であった。
- ・会の進行に協力できなかった（3年生の中での反省）

これらの気づきは、自分たちが会を運営する主催者なのだという意識が出てきた現れだを考える。いもパーティーは一度限りの行事ではなく、そこに至るまでにいくつかの過程が必要である。このことが、子ども達に考えるチャンスを与え子どもたちが自分の力で会が運営できるよう鍛えてくれると考える。主催者としての意識は次のような行動からも明らかになっていった。

#### ① 水やり

みんなで植たいもが根付くまでの間雨が降らなかった。このためリヤカーで畑まで水を運ばなければならなかった。朝の会が始まる前と放課後、ペットボトルを持って何回も畑に往復することが中学年の子ども達の日課になった。また、グラウンドでの早朝活動の後、「畑のいもを見に行ってもいい？」という子ども達の声も聞かれるようになった。

#### ② 草抜き

炎天下での草抜きも大変だった。しかし、水やりで苦労した分がんばって草抜きをする子どもたちの姿があった。夏休み中に雨が多く草が一気に芽を出し、いも畑をおおってしまった。いもは背が低いので、太陽の光を受けることができず成長が悪かった。子どもたちは9月になって学校が始まったとたんに「いもはどうなった？」そして草に埋まっているいもを見て、「…。」また草抜きが始まった。

#### (2) さつまいもを掘る

いも掘りも縦割り班毎に行った。写真1は、掘り方を教えているところである。小黒板を使ったり、班毎に3年生と4年生で協力して並ばせたりと、いままでの経験が生かされたものいえる。

写真2は、低学年の子どもたちがいもを掘っているところを手伝っている場面である。1年生は、初めての活動であることを考えて、なるべく大きなのを掘ることができるようにしている姿がほほえましかった。また、いも掘りの後の振り返りでは、一年生に感想を話してもらうなどの工夫もみられた。

写真1



写真2

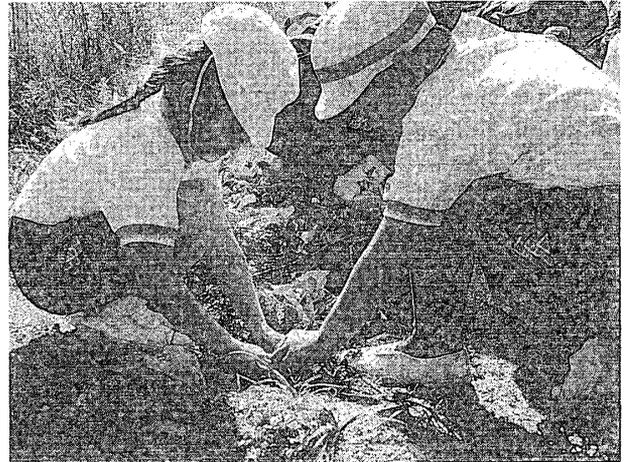


写真3は会に先だつての説明の様子である。夏休み中に草におおわれたことがひびいて不作であった。一年生の感想の中にも「たくさん採れてよかったと思いました。」「去年の方が多かったという話を聞いて少し残念でした。」などがあり、複中の子ども達にとっては、残念な思いが残ったようだ。しかし、3年生は、次の年にがんばる気持ちを持ってよかったといえる。もっとも、全然採れないかもしれないという不安もあっただけに収穫できていもパーティーになりそうだということに一応安心はしたようであった。



写真3

### (3) いもパーティーの計画

**いもパーティー (案) 複中**

- 一、めあて  
みんなで協力しあって楽しく交流しよう。
- 二、校長先生や、いろいろな人をよび、みんなの料理を作つて、人に食べてもらいたいことまでやる。
- 三、ルール  
。大量にあつたものをつかうときは、学校ではしゃんできない。すこしだけ油をつかうときは、学校で使う代金は、一人あたり100円(班で100円以下)。  
。自分の家にある物は、もってきて、ない物は100円あたりで買う。
- 四、これからの日程  
金よう日の一、二時間目予定
- 五、今日きめること  
いもパーティーの計画を立てる。  
(家からもってくる材料やこれから買う材料のことまで)
- 六、班での話し合い  
(1)作る料理  
(2)材料  
(3)役わり分担
- 七、係  
班長(かざり)：原田さん、松垣さん、岡田さん、丸山さん

準備(かざり)：原田さん、松垣さん、岡田さん、丸山さん

資料1

いろいろな工夫をする。百円を使うのに一人ではなく全員のお金を出し合うことで、百円では買えないものを買うことができたり、無駄なくお金が使えたりできるのである。また、子どもたちは、これまで

いもパーティーの計画は、右の資料1に示すように、4年生の立案で複式集会で話し合うことになった。複式集会には、給食時間を当て、各学級で配膳した給食を持って集まった。そのときの話し合いをしている様子が写真4と写真5である。縦割班毎に一つのテーブルで食事をしながら、いもパーティーで作る料理のことについて話し合った。一人当たり百円までの材料費とし、班で工夫して料理を作ることとした。また、調味料については、学校で準備することにした。金額で制限を加えることにより、子どもたちはいろいろ



写真4

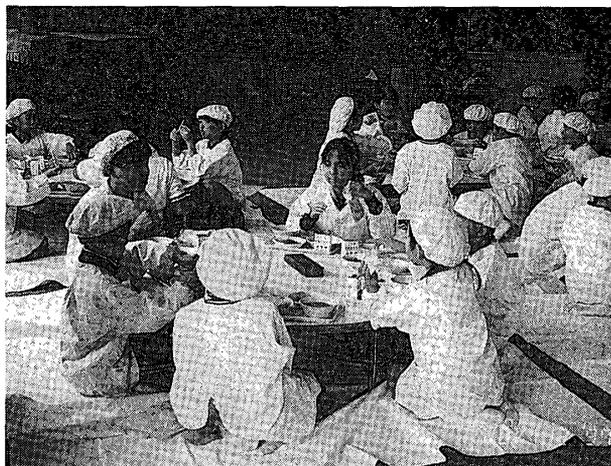


写真5

作ったことのない料理を作りたいという願いも持っている。これまでの調理の経験の豊富な高学年の子どもたちが中心になってアイデアを出し、今年も奇抜な料理が生まれた。パーティー自体の新しい企画として校長先生を始め、教科等でお世話になっている先生方をよんで、料理コンテストを開こうというものである。各班で一皿ずつ自慢の料理を出して審査を先生方をお願いしようというものであったため、子どもたちの料理にかける意気込みも違って来たといえる。

(4) いもパーティー

写真5と写真6はいもパーティーのための料理作りの時の写真である。

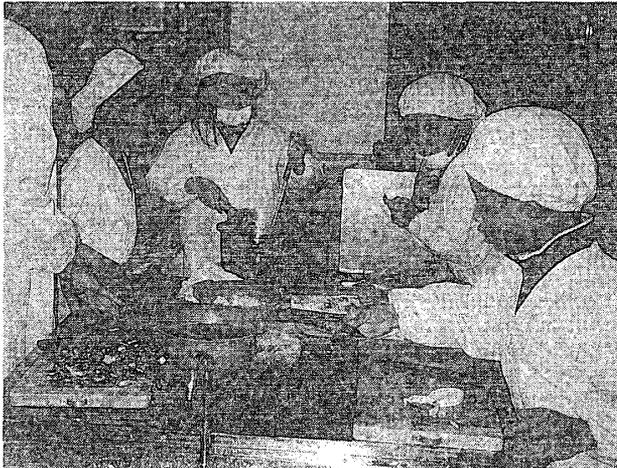


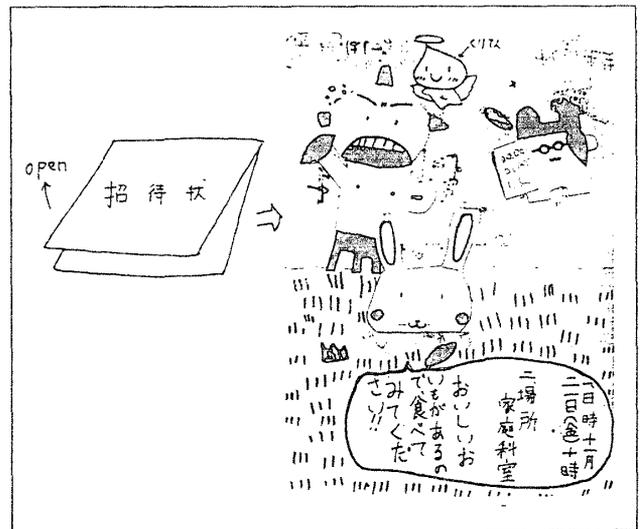
写真6



写真7

低学年の子どもたちを各グループの高学年の子どもたちが上手にリードしているのは、これまでの活動での成果と考えられる。また、自分の学年と前後の学年は同じ学級であった経験を持っているので、その分かかわりが深くなっているともいえる。

家庭科室の使い方がわからない子どもたちに、道具がある場所を教えたり、包丁の使い方や後かたづけの方法などを示したりと子どもたち自身で会を進める気持ちがよく現れていた。右の図2は、審査員先生方をお招きする招待状である。休み時間を使って作った力作である。また完成した料理は、次に示す写真8～11である。



資料2

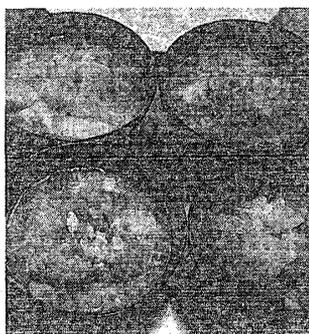


写真8

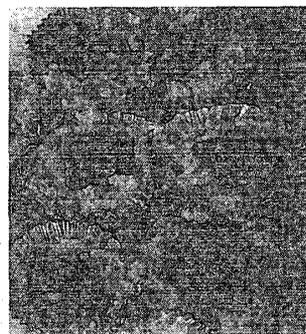


写真9



写真10

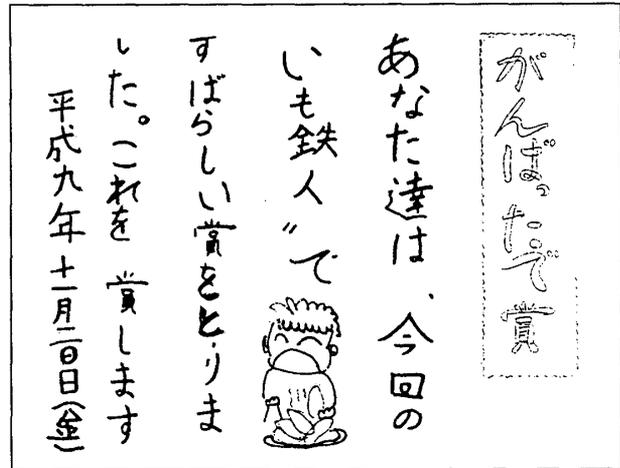


写真11

写真12と図3はコンテストの表彰の様子と子どもたちが作った賞状である。



写真12



資料3

### 3. 活動を振り返って

子どもたちの一連の活動は、自分たちが過去に経験してきた事柄を土台として行われてきたものである。縦割活動を行うとき過去の経験が引き継がれていくことが最も重要になってくる。「今度はどんな活動にしたい」とか、「ここを工夫すればよかった」などの思いが子どもたちの胸に残ることにより、より充実した活動が生まれてくるものと考えられる。ただ、経験したことをそのまま行うのでは、活動は形骸化してしまう。子どもたちの自分たちらしさを出そうとする意欲をうまく支援していくことが大切であると考えられる。その意味では、教師の支援は一年先を見越して、次に活動の中心となるべき子どもたちにも向けられることが必要であるといえる。複式中学年で主催した「いもパーティー」でいえば、3年生は4年生の活動を意識して観察でき自分たちの来年の活動に向けてのめあてが持てることであり、4年生にとってはこれから高学年として複式の行事のみならず、学校全体のリーダーとしての自覚が生まれてくることである。

#### (1) 子どもたちの振り返りから

##### 3年生の振り返りから

- ・さつまいもを植えるとき、4年生の人たちが絵に描いて説明してくれました。よくわかったので、4年生になったら、私たちががんばりたいです。
- ・図書室でいもの植え方を調べたり4年生の人はよくがんばっていたと思いました。
- ・4年生が説明してくれたことを手本にしてがんばりたいです。
- ・今年のは大きいのも採れたけど小さいものが多かったので、来年は大きいのがたくさん採れるようにしたいです。
- ・いもの世話は大変だったけど、来年はもっともっと世話をして大きいのをたくさんとりたいです。
- ・来年は、今の4年生とは違うことを考えて「いもパーティー」をやりたいです。
- ・複低の時は中心になって行事をやったりしたことがなかったので、複中になって初めて中心になってやった行事がよい経験になりました。
- ・ぼくが1年生の時にしてもらったように、1年生に「火は危ないから気をつけてね。」などと教えてあげたいです。
- ・最初のうちは、低学年の人も高学年の人も、水やりや草抜きをがんばっていたけどだんだん数が少なくなりました。私たちは、中心なので（複中主催の行事なので）がんばってやりました。中心になってやるのは大変でした。

- ・4年生が司会したいもパーティーでは、やけどなどの注意もちゃんとしていました。来年私もがんばりたいです。

#### 4年生の振り返りから

- ・みんなの前で初めていもの植え方を説明しました。とてもどきどきしました。
- ・複低の人たちにわかるように植え方を説明するにはどうしたらよいかを考えました。絵を描いて説明することにし、図書室で調べました。それでも説明にはちょっと手こずりました。
- ・今までは、複高のお兄ちゃんお姉ちゃんが中心になって考えていたので、会を開くことは簡単だと思っていました。今回自分たちでやってみて会を開くことはとてもたいへんなことだということがわかりました。
- ・いもの世話で、今年は遠くまで水を運んだり、草抜きをしたりしたのに去年の方がたくさんいもができていたのは残念でした。先生たちを呼んでコンテストができたのはよかったです。
- ・自分たちが中心になってやることはたいへんなこともあったけど、いもを掘るときもパーティーを開くときもとてもわくわくしました。いもパーティーで料理を食べるときは、格別においしく感じました。
- ・パーティーのプログラムを企画する係になってとても楽しかったです。自分で工夫できてよかったです。
- ・これまでは、料理を作るときいろいろ教えてもらっていたので、今年は私が2年生の人に教えてあげました。
- ・自分たちで絵を描いて説明したり、司会や進行をするのは初めての経験でした。3年生までは掘ったいもを食べるばかりだったけど、中心になってやってみると低学年の人にわかるように絵を描いたり説明したり、複高の人たちは苦労していたんだなということがよくわかりました。パーティーでみんなで楽めてよかったですと思いました。

3年生は、次の学年では自分たちが中心になって活動をしていく自覚が見られる振り返りができている。4年生のがんばっているところを素直に認め、今度は自分たちの力で新しい何かを見つけ加えていこうという姿勢も見られる。

4年生は、自分たちで活動を運営していくことのたいへんさに気がついた子どもたちが多い。このことは、5年生になったとき6年生が中心となって行う行事への参加態度によく現れると考える。これまでのお客さんの活動から自ら積極的に活動を楽しいものにしていこうとする態度となって現れてくると考えている。

#### 4. 終わりに

複式の縦割活動は、学級に上学年と下学年が存在することで、よき伝統となって引き継がれやすい環境にあると考える。必ず上の学年のがんばっている姿を下学年が見ているからである。教師の「次は3年生の番だからね」の一言で3年生は実によくがんばるのである。また、4年生はいつも自分たちが中心になって活動することで、3年生によいところを見せようところらもまたはりきるのである。異学年の集団を抱える複式学級にあっては、上の学年に活躍の場を与え、下の学年に次の活躍の場を約束することでお互いが協力し合い、認め合っている関係を築くことができると考える。教師は、上学年の活動を支援し成功の達成感が味わえるようにし、下学年には上学年の努力している姿を紹介することが大切といえよう。中学年の段階で、高学年を含めた縦割活動を中心になって企画運営する機会を経験することは、振り返りの中で子どもたちも気がついているように、たいへんさとやりがいの両方を経験できるという意味で大きな意味がある。それは、これらの経験が子どもたち自身に自らの力で物事をやり遂げるための一つの大きな学習として残るからである。その意味で、子どもたち自身に企画運営をまかせる行事を設けることが、教師の大きな一つの支援であるといえる。